

日本語教育学会主催 シンポジウム

外国人児童生徒等教育を担う教員・支援員の資質能力の育成  
—モデルプログラム開発に向けて—

## モデルプログラム（試案） 検証事例報告

報告者：菅原雅枝（東京学芸大学）

### 1 プログラム試案検証の実施状況

(1) 目的  
資質・能力「実践する力・成長する力・環境を創る力」モデルに基づき、授業（養成段階）、研修（現職）のプログラム（試案）を設計・実施し、アンケートにより内容・方法の有効性を検討する。⇒モデルプログラム（案）編成の資料

(2) 実施件数 本日紹介する検証事例

養成		現職教員研修		支援員 研修	
基礎教育	1件	基礎教育	3件	経験者	2件
専門教育	4件	専門教育	2件		

### (3) 検証方法

アンケートにより、受講者の研修への期待と授業・研修後の満足度、ビリーフの変容、企画者・講師の研修目的とその達成度を調査。  
＜アンケート内容＞

受講者	研修企画者・講師／授業者
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 授業研修で学びたいこと／どのくらい学べたか</li> <li>・ 外国人児童生徒・日本語指導についての考え</li> <li>・ 参考になった点、今後受けたい授業・研修、効果的な形態</li> <li>・ 外国人児童生徒教育・日本語指導に関わりたいか</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 想定した受講者</li> <li>・ 授業・研修の目的と内容構成</li> <li>・ 受講者はどのくらい学べたか</li> <li>・ 受講者にさらに高めてほしい力、そのための方法</li> </ul>

### 2 検証1 専門研修

#### ①研修の概要

- ・ 時間 1時間30分×2回
- ・ 受講者 国際教室担当教員（経験者）、一般学級担当教員
- ・ アンケート回答者 26人
- ・ 研修タイトル 日本語指導者養成上級講座「日本語と教科の統合学習」
- ・ 到達目標 日本語と教科を統合した指導の必要性を理解し、対象となる児童生徒のニーズを考慮した指導の計画を立てられるようになる。

②研修の流れ

活動	形態	時間	モデルプログラムとの対応
1. 「日本語と教科を統合した授業」の必要性について確認する 2. 日本語の目標の立て方を理解する 3. 授業展開のポイントとそれぞれの段階で期待される活動について理解する	講義	30分	⑩認知発達と言語習得 ⑰日本語指導の理論と方法
4. 取り上げたい単元を決定し、対象となる児童生徒の実態についてまとめる	個人	10分	⑰日本語指導の理論と方法
5. グループで4のうち一つを選択し、教科の目標と日本語の目標を設定する	班活動	40分	
6. 第1回のまとめ・第2回に向けた課題の提示		10分	
7. 指導案の検討	班活動	60分	
8. 「日本語と教科を統合した授業づくりまとめ	講義	30分	

③結果1 期待度と満足度 (評定尺度1~5、0:扱っていない)

研修内容	期待	満足度	企画者	講師
1.現状と受け入れ施策	69%	3.44	0	0
2.学校での受入体制	54%	3.37	3	3
3.外国人児童生徒等の	50%	3.32	0	0
4.外国人児童生徒等の	85%	3.90	0	4
5.外国人児童生徒等教育の理念・理論	38%	3.55	4	3
6.言語能力の捉え方	58%	4.30	4	3
7.学力・認知的発達と言語習得	62%	4.39	4	4
8.日本語指導計画の立て方	54%	4.39	4	4
9.日本語指導方法	73%	4.35	4	4
10.日本語の特徴	46%	3.27	0	0
11.母語母文化アイデンティティ	23%	3.29	0	0
12.相互理解・学級経営	42%	3.30	0	0
13.外国人児童生徒等のキャリア	42%	2.95	0	0
14.保護者との連携	42%	2.71	0	0
15.地域の支援状況とネットワーク	31%	2.75	0	0

意図・期待・満足度はほぼ一致

企画・講師は「扱わなかった」項目にも「満足」

③結果2 事前事後のビリーフの変化

項目 6 (全く思う) - 1 (そう思わない)	前	後	差
1日本で生活していれば自然に日本語を身に着けられる	2.76	2.62	-0.14
2日常会話ができれば教科内容が理解できる	2.14	1.71	-0.43
3家族とは母語で話す	4.60	4.76	0.15
4学校教育で外国人の子どもの文化・言語に触れる活動	4.95	4.67	-0.30
5重要なことは繰り返し練習すること	4.36	3.62	-0.74
6母語での読み書きは日本語の読み書きにプラス	5.24	5.38	0.14
7日本語能力が低い児童生徒には日本語能力に合わせて学習内容を下げる	2.95	2.78	-0.28
8母語を高めることが資源になる	4.50	4.58	0.03
9日本語を上達させるには日本の文化習慣に従う	3.69	3.57	-0.12
10語彙量を増やすことが大事	4.10	4.05	-0.05

一定の変容 1 単なる繰り返しは良くない  
2 会話力だけでは教科内容理解は困難

③結果3 「研修」に対する認識

内容	企画者	講師	受講者
1 現状と課題			○
4 心理と適応	○		○
6 言語能力の捉え方	○		○
7 学力・認知発達と言語習得	○	○	○
8 日本語指導計画の立て方	○	○	
9 日本語指導の方法	○	○	○

項目4、6、7、8、9については、受講者の期待度も満足度も高い

研修への期待には、ズレがある。企画者は「日本語指導の上級者の養成」、講師は「日本語と教科の統合学習」実践力、受講者は「何でも吸収したい」。しかし、満足度は、研修の内容に沿った結果。

#### ④モデルプログラム開発への示唆1 (研修)

- 研修実施側が意図した内容は、おおむね満足度が高い。
    - ⇒ 研修企画者・実施者間の情報交換、打ち合わせの重要性
  - 研修テーマと受講者の期待度には差がある。
    - ⇒ 受講者の経験、状況の多様性=ニーズの多様性
  - ビリーフの変化 (小さいが)
    - ⇒ 研修内容「日本語と教科の統合学習」に沿った方向で変化
- ※ 研修企画者の役割の重要性
- 1) 地域の実態等から受講者に養成する力を明確化
    - ↑モデルプログラムで研修で提供すべき内容の全体像を捉える
  - 2) 現場のニーズ (困り感・期待感) を把握して企画・運営
    - ⇒ 研修内容・活動形態を選択して研修を設計すること
    - 講師に研修目的・意図を明確に伝えること

講師は把握が困難

### 3 検証2 養成・専門

#### ①授業の概要

- 1時間30分×15回
- 受講者 非教員養成課程の3・4年生  
(日本語教員養成課程の選択授業)
- アンケート回答者 21人 (うち、留学生2人、外国ルーツ1人)
- 到達目標 日本国内で第二言語として日本語を学ぶ子どもたちの現状と、年少者への日本語教育の理論を知り、指導案を立てられるようになる。また、子どもたちのニーズを知り、支援にかかわろうとする。

63%が教員免許取得

#### ②授業の内容 (15回分のシラバス)

	目標	形態	内容
1	日本語指導が必要な児童生徒の現状と背景を理解する	講義	③現状と受け入れ施策 ⑥社会的、歴史的背景
2	子どもの言語習得の特徴を知る	講義	⑩認知発達と言語習得・母語の発達
3	年少者への日本語教育のポイントを知る	講義	①外国人児童生徒教育の理念と理論 ⑩認知発達と言語習得 ⑰日本語指導の理論と方法
4	日本語学習中の児童生徒が直面する課題を知る	体験授業 講義	⑤学校での受け入れ体制 ⑩認知発達と言語習得 ⑱言語能力の捉え方
5	外国人児童生徒の心理とストレスについて知る	講義	⑤学校での受け入れ体制 ⑧保護者との連携 ⑪母語・母文化・アイデンティティ
6	外国人児童生徒教育をめぐる施策について知る	講義	③現状と受け入れ施策 ④学校組織や教育行政 ⑨地域とのネットワーク ⑱言語能力のとらえ方

#### 授業の概要2

7	年少者のための日本語テキスト、資料の特徴を知る	教材分析	⑰日本語指導の理論と方法
8	サバイバルの指導を考える	講義 ディスカッション	⑰日本語指導の理論と方法
9	日本語基礎の指導を考える	講義 活動設計	⑰日本語指導の理論と方法
10	教科と日本語の統合学習の必要性を知る	事例報告 ディスカッション	⑰日本語指導の理論と方法
11	日本語と教科の統合学習の方法論を理解する	講義	⑰日本語指導の理論と方法 ⑳教科の内容
12	年少者への授業を考える①	指導案作成/活動設計	⑰日本語指導の理論と方法
13	年少者への授業を考える②	指導案作成/活動設計	⑰日本語指導の理論と方法
14	年少者への授業を考える③	授業案の発表 ディスカッション	⑰日本語指導の理論と方法
15	まとめ		

### ③結果1 期待度と満足度

内容	期待	満足度	授業者
1.現状と受け入れ施策	68%	4.33	4
2.学校組織や教育行政	42%	4.05	2
3.学校での受け入れ体制	68%	4.14	4
4.外国人児童生徒等の背景	79%	4.38	4
5.外国人児童生徒等教育の理念・理論	42%	4.14	4
6.外国人児童生徒の心理と適応	68%	4.48	4
7.言語能力の捉え方	16%	4.19	4
8.学力・認知的発達と言語習得	47%	4.29	4
9.日本語指導計画の立て方	68%	4.29	2
10.日本語指導方法	79%	4.33	3
11.日本語の特徴	26%	3.52	0
12.母語母文化アイデンティティ	42%	4.24	3
13.教科の内容に関する知識	26%	3.86	0
14.相互理解・学級経営	42%	4.1	1
15.外国人児童生徒等のキャリア形成・社会参加	32%	3.71	1
16.保護者との連携	32%	3.9	2
17.地域の支援状況とネットワーク	37%	3.9	2

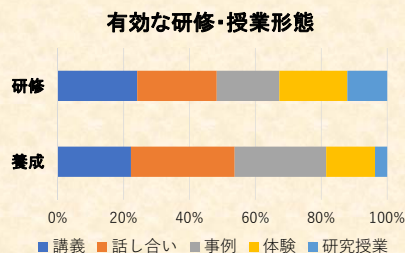
「期待度」は低いが、「学べた」と感じた項目

### ③結果2 ビリーフの変化

項目	前	後	差
1日本で生活していれば自然に日本語を身に着けられる	3.47	3.2	-0.27
2日常会話ができれば教科内容が理解できる	3.11	2.13	-0.97
3家族とは母語で話す	4.53	4.87	0.34
4学校教育で外国人の子どもの文化・言語に触れる活動	4.95	5	0.05
5重要なことは繰り返して練習すること	4.63	3.73	-0.9
6母語での読み書きは日本語の読み書きにプラス	4.37	5.07	0.7
7日本語能力が低い児童生徒には日本語能力に合わせて学習内容を下げる	3.58	3.47	-0.11
8母語を高めることが資源になる	4.42	4.93	0.51
9日本語を上達させるには日本の文化習慣に従う	3.84	3.4	-0.44
10語彙量を増やすことが大事	4.16	3.53	-0.62

変容 会話はできても教科理解は困難で、繰り返すだけでも、語彙力だけでも十分ではない。母語は資源となり、日本語学習にもプラス

### ③結果3 研修・授業形態・学びたいこと



- 【今後学びたいこと】
- 具体的な指導方法を知る
  - 指導の様子を見たり、実際に指導したりする経験  
(映像を見る、外国人児童生徒に接する、授業参観をする)
  - 子どもたちの心理、心のケアの方法

### ④モデルプログラム開発への示唆2 (養成)

- ▶満足度・ビリーフの変容とも大きい。
    - ⇒ 養成段階での学習の意義  
大学の授業として15週で「外国人児童生徒等教育の全体像」を学ぶことの効果
  - ▶「期待していなかったが学べた」項目が多い。
    - ⇒ 授業前の「外国人児童生徒等教育」に関する課題認識が変容
    - ⇒ 取り扱うべき内容  
「学校組織・行政」「言語能力の捉え方」「学力・認知的発達と言語習得」「母語・母文化アイデンティティ」「相互理解・学級経営」
  - ▶今後の学習：実地経験、具体的案指導方法、心のケア  
授業・研修形態：話し合い>事例研究>講義>体験
    - ⇒ 対象の子ども・教育の方法に具体的なイメージがもちにくい  
…養成段階から現場の実際を経験し、分析する活動が重要
- ※企画者=授業者…受講者の経験や知識、ニーズを把握しやすい  
⇒ 授業者の知識・授業力が、能力養成の成否における決定的な要素  
↑ モデルプログラムによって、そのスコープと活動を提示

「期待しない」項目の重要性